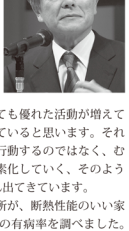
実行委員会 委員長
小宮山 宏



低炭素杯の季節がやってまいりました。今年は、素晴らしいロゴも出来上がり、参加者も増え、大変充実してまいりました。皆様には、心から感謝したいと思います。
発表内容を見ているのですが、とても優れた活動が増えてきて、中身がとてもよくなってきていると思います。それというのも、低炭素とは我慢して行動するのではなく、むしろ我々が快適になりつつ、低炭素化していく、そのような概念を具体化した活動がずいぶん出てきています。

一昨年になりますが、建築研究所が、断熱性能のいい家に住んでいる人とそうではない人の有病率を調べました。引っ越しをして1年以上の人たちを調べたところ、調査の対象となった10個の病気のすべてで「いい家」に移り住んでいる人の有病率は激減していました。心臓疾患が81％、アトピー性皮膚炎が6割も減っていました。つまり、高断熱住宅では、エネルギー消費は8割も減り、その上に健康で快適になれるわけです。また、近くの山を間伐し、それをバイオマスとして利用して発電するとか、これは低炭素でもあるのですが、森を復活させ、里山を復活させる、里海という言葉もありますけれど、そうしたものを復活させる。つまり低炭素の活動は、人と自然と地球を健康にするのです。CO2の削減は、苦しいことを我慢するのではなく、もっと快適な暮らしを実現しながら、低炭素化を図っていこうというのが正しい方向だと思います。

では、このような取組みを、どこで、だれが、どうやってやるのか、答えは「生活の場」なんです。なぜかというとCO2は工場からも、生活の場からも出ていますが、先進国はどこもそうですが、日本でも6割のCO2が、家庭、オフィス、自動車など生活の場から出ています。したがって我々の暮らしを快適にしつつ、低炭素化して行くということが全体にとって大きな意味のあることなのです。

そこで、このことの実現のために、我々は“ネットワークofネットワークｓ”を作る必要があります。つまり、皆さんがいろんなネットワークを作って低炭素活動をやっているのだけれど、それをこの場でさらに大きなネットワークとすることが必要なのです。人も自然も地球も健康になるよう、ぜひ皆さんが先頭に立つことをお願いします。
これから2日間、皆さん頑張ってください。

環境副大臣
田中 和德

低炭素杯2013表彰式の開催にあたりまして、一言御挨拶を申し上げます。

我が国はこれまで低炭素社会づくりの推進について官民を挙げた取組を強力に実施してきたところですが、東日本大震災以降は、エネルギー需給の逼迫の観点がハイライトされた中、節電等によりこの問題にしっかりと対応するというライフスタイルが注目され、低炭素社会づくりに向けた一人ひとりの意識変化を多くの方々が感じた状況にあります。

地球温暖化対策を推進するためには、政府の努力のみならず、地方自治体、事業者、ＮＰＯはもちろん、地域の方々一人ひとりの力が必要不可欠です。

本日ご参加の皆様方が、平素から、それぞれの地域において、温暖化防止活動に尽力されておられることに対し、環境副大臣として、心から敬意を表します。また、小宮山実行委員長はじめ委員の皆様方、共催企業・団体、全国及び地域の地球温暖化防止活動推進センターの皆様方に対し、昨年度に引き続き、全国各地で展開している低炭素社会づくりに関する地域活動を報告し・学びあい・連携の輪を拡げる「場」を作っていただき、厚く御礼申し上げます。

今回の「低炭素杯」には、全国各地から40の代表が参加され、それぞれの地域に根ざした、アイデアにあふれた取組が発表されました。皆様方の活動は、我が国での模範となる取組ばかりです。今後ともより一層のご活躍をいただき、全国で地球温暖化の防止に取り組む多くの方々の先導役となっていただきますよう、心より期待いたしております。

なお、環境大臣賞の受賞者に副賞として授与されますトロフィーは、造形家の齊藤公太郎氏が福島県の石川町立野木沢小学校の皆さんとの協働のもとに、推定樹齢100年という寿命間近のモミジを活用して制作され、たくさんの様々な思いがこめられたものと伺っております。野木沢小学校の皆さん、本当に素晴らしいトロフィーをありがとうございました。
先ほど、小宮山委員長と話をしていましたが、今年は特にレベルが上がり、素晴らしい活動ばかりであるとの話でございました。さらに来年からもレベルが上がり、環境の国と言えば「日本」と言われるように、お力をいただければありがたいと思います。
最後になりましたが、皆様方の今後ますますの御健勝と一層のご活躍をお祈りいたしまして、私の挨拶とさせていただきます。